



かんじょう
【奨励賞】 神定 かおり

おじいちゃん、御無沙汰しています。というのもおかしいでしょうか？
季節の移ろいは早く、今はその声を思い出せないけれど
幼かった私が眠りにつく前、暖かい布団の中で昔話を
聞かせてくれた事は良く覚えています。
おじいちゃんが聞かせてくれたお話は、
時々途中の内容や結末を忘れてしまうものでしたが、
目を閉じて、物語の情景や登場する者の心情を想像するのは楽しく、
心地よい眠りにおちていったものでした。
幼い日の思い出は私に大きな影響を与え、今私は絵本を描く事に
生き甲斐を感じています。
時間とは命そのものですね。
その命を使って注いでくれた愛情に今更ながら気づきました。
いつか流れたニュースの話です。
ある人が道行く人の後ろ姿に声をかけたところ、
無視された事に腹を立て、危害を加えた事件がありました。
声をかけられた人は、耳が不自由で気がつかなかっただけなのです。
誰にでもそうせざるを得ない事情があるかもしれないと
思いやる想像力があればと気づかされました。
おじいちゃんの聞かせてくれた昔話が私に影響を与えたように
絵本を描き伝える事で、思いやりの心が育まれればと願っています。
それはおじいちゃんの願いでもあるように思います。
初めての天国への手紙、どうか届きますように。
そして大好きなおじいちゃんは今も私の意識の中に生き
いつも優しく笑いかけてくれて本当にありがとうございます。

(千葉県／45歳／パート〈調理〉)

